

静脩

1992年2月

Vol. 28, No. 4

The Kyoto University Library Bulletin

情報と専門職員と

理学部動物学教室・生態学研究センター

川那部 浩 哉

昨年4月、京都大学に「生態学研究センター」が発足した。20年以上の長きにわたって、日本のみならず世界の生態学研究者が切望していたもの。従って当然ながら、全国、いや国際共同利用機関として機能すべく、運命づけられているものである。

共同研究とは何々か。さまざまな利用形態が存在するものの、その一部に、広い意味での情報の収集・保存・検索・提供のあること、言うまでもない。だが、口に言うのと実際に行うのとは、話が全く異なるものであること、これまたあたりまえ。すなわち、実際に何をやるべきなのか、また何が可能なのか、それが問題である。

場所がない。人がない。金がない。時間がない。これまたこの国の現状では、当然すぎていまさら言う気も起こらない。だが、ないないづくしだから考えもしないと言うのも、あまりにも締まらない。そこで突如として、「壮大なこと」を「夢想」する。

*

29年前の話である。ドイツのマックス・プランク研究所群のうち、国の北端に近いプレーン湖畔

にある陸水学研究所に、初めて遊びに行ったときのことだ。当時6部門、18人ばかりの上級研究者がいたこの研究所、その図書館は、壮烈なまでに見事だった。陸水学の創始者の一人、アウグスト＝ティーネマンさん以来の「伝統の力」と言ってしまうとそれまでながら、雑誌・単行本はまさに圧倒的な量。かなりの時間をここで費やした。

図書に広く関心のある、へんな日本人研究者が来たというので、司書氏が数人寄ってきた。現在の日本の陸水学の全体的様相について、根掘り葉掘り聞いたうえで、日本の雑誌の名まえの変遷過程だの、日本語で書いてある奥付の内容だのについて、所蔵の雑誌や単行本を机のうえに持ち出し、積み上げての質問責めが続いた。最近日本の雑誌の名まえの、「ジャーナル＝オブ＝カレッジ＝オブ＝なんとか」から「ユニバーシティー＝オブ＝なんとか」になるのが多いが、単科大学のままであることは明白なのに、総合大学なる名に変わるのは何故か、などと言う質問には適当に答えたものの、どれだけの雑誌を購入すれば、日本陸水学の全体的様相を偏らずに理解することが可能かとの質問などには、せいぜいが陸水生物学とその関

連分野の程度にしか、まともには、すなわち体系的には勉強していない身には、まさにしどろもどろも良いところだった。翌日メモを書きつけてあらためて話し、とりあえずの責めは果たしたものの、それから17年のちに日本で国際陸水学会議があり、そのとき『近年の日本の陸水学研究』なる英文出版物が共同作業で書かれるまでずっと、気にかかっていたものである。

だが私にとっては、日本の陸水学の全体的様相を詳しく聞き出そうとしたのが図書館の司書の人たちであったこと、これ自体が新鮮な驚きだった。そこで当人たちにも、また各部門の何人かの研究者たちにも、逆にいろいろ尋ねてみたのである。

答えはこうであった。

例えば、当時の動物部門はほとんど、水棲昆虫とくにカワゲラ研究者のみから構成され、その主な調査地域は南アメリカであった。このひとつとが図書館に入れる本は、どうしても自分の関心のある部分に限られる。しかし、期限が来てこの連中がやめたり移ったりしたあと、次に動物部門にどういう研究者群が来るかは、当然ながら予測できない。いや、おそらく、今と異なる材料と問題に関心をもつひとつと占める可能性がうんと高い。

そのときに、何も困ることが起こらないように、雑誌や単行本を収集しておくのは、司書の当然の役目である。いや、各地の大学や研究所の連中が、陸水学に関する珍しい文献を必要とするとき、それを提供すべくつねに用意しておくのは、司書のあたりまえの役目である。日本語でしか書かれていないものでも、優れたものはいつの日か読む人のある可能性があるから、それも出来るだけ選んでおきたい。しかもそのうえに、つまらぬ雑誌や単行本を買わない、書棚をくだらない本で詰めないことも、これまた司書の役目である。そして、これらを見事に行うことが司書の業績である。これが一致した意見であった。

とくに若い司書や研究者たちは、いまさらあたりまえのことを、何で尋ねるのかと言わんばかりだったのである。

研究者が教科書はもちろん、総説を書くにあた

っても少し広い分野にまたがるときには、司書に相談し助言を仰ぐのはごくあたりまえのことだと、教授連からも聞いた。そして、この人たちのほとんどは、司書の資格はもちろんながら、陸水学の何かの研究で博士の学位をとり、むしろ学の全体像に興味があるために、この職についているのだということも、あらためて知った。

ここ数年、プレーンには行っていない。ただ3年前にミュンヘンで国際陸水学会議があったとき、雑誌や単行本といった従来の図書などのほかに、もっと生の、いわゆる情報についても、同じことが同様に行われ始めているとの話を聞いている。

*

ロンドンにある大英自然史博物館の、標本庫を最初に見学したのもこのときだが、そこへ潜り込んだと言える始めは15年前である。オーストラリアとニュージーランドにのみ分布し、すでに絶滅かと疑われていたプロトトロクテス属の魚、私はこれを名付けてミナミアユと称しているのだが、その標本を全部、「調べた」とはとても言えない、ただひとつとおり見た。

前もって申し込んでおいたところ、坐るべき机が用意され、そのうえに2台の顕微鏡と解剖道具など一式、それに標本瓶がずらりと並んで、私を待っていた。1910年代採集の古いものがほとんどで、しばらく塩漬にしておいたとおぼしきもので混じっている、まことに貴重な標本。それはともかく、外来者へのその提供ぶりは見事だった。「調べ終わった標本は隣の机に移すだけのこと。また、どの部分の数を計測し、どこの長さを測定するのかが決まれば、直ちにそれを行うから指示するように。」魚類部の技官の人は、こう言って立ち去った。

残念ながらのちに、この大英自然史博物館には人員削減があった。知人の研究者も何人かここを去ったが、技官の削減率はさらに大きかったと聞く。私は残った研究者に、「同じことなら貴君のような研究者がみな首になっても、技官の人たちは残しておくべきだったのに。そうすれば少なくとも僕には博物館が使える。研究者はどこかで補充できても、標本は破壊されればその補充はでき

ないのだから」と、あるところで話した。相手は真意を理解し、苦笑しながらもこの意見を是としてくれたこと、もちろんである。

この、まさに専門職としての技官群の存在こそが、あの国の生物学研究、いや広く科学研究をほんとうに独創的なものとして進めるのを支えて来たこと、言うまでもない。

*

生態学研究センターは、何よりもとは言わないまでも、こういう本格的な専門職員を、少なくとも

も共同利用機関として、絶対に必要とする。だがこれを、「壮大なこと」と言い、「夢想」と言うのは、実は誤りではあるまいか。1年前から私は、「次の概算要求では、教官を振り替えて専門職員を取ることにしよう」などと口走って、一部から顰蹙を買っているようだが、ほんとうのところはどうか。

昨年12月末日限のこの原稿、じつは年が明けから書いている。いっぱい機嫌の初夢に過ぎぬと人は見るか。まあとにかく、支離滅裂なところは正月に免じて、許して頂きたい。

附属図書館所蔵図書21点が貴重書に認定される

「京都大学附属図書館貴重書指定等審査委員会」（平成3年10月24日開催）において審議し決定された貴重書について、貴重書指定の手続きが完了しましたのでお知らせします。



今昔物語集（鈴鹿本）鎌倉中期

申請第7号 今昔物語集（鈴鹿本） 鎌倉中期
卷二、五、七、九、十、十二、
十七、二十七、二十九
今昔物語集の現存最古の写本、
線装本、桐箱入り

9冊

申請第8号 明史藝文志抄本 雍正初頃
一～八
黄虞稷の「明史藝文志」稿の伝写
本、線装本、朱筆による書込みあり
25cm. 8冊

- 申請第9号 Histoire naturelle du Sénégal / par M. Adanson. — Paris, 1757
xcvi, 275 p., 19 folded leaves of plates : ill., 1 map (folded) ; 26cm
(セルガルの自然史) 1冊
- 申請第10号 A voyage to Senegal, the Isle of Goree, and the River Gambia / by M. Adanson. — London, 1759
xiii, 337 p. : 1 map (folded) ; 21cm
(セネガル、ゴレ島、ガンビア川周航記) 1冊
- 申請第11号 Some historical account of Guinea / by Anthony Benezet. — Philadelphia, 1771
iv, 144, 53 p. ; 23cm
(ギニア史記) 1冊
- 申請第12号 A new and accurate description of the coast of Guinea / written originally in Dutch by William Bosman. — London, 1705
493 p., [8] leaves of plates (1 folded) : ill., map ; 23cm
(ギニア海岸についての新しくかつ正確な記述) 1冊
- 申請第13号 The English acquisitions in Guinea and East — India / by Robert Burton. — London, 1728
184 p. : ill. : 15cm
(ギニア及び東インドにおける英語の修得) 1冊
- 申請第14号 The history of Dahomy : an inland Kingdom of Africa / compiled from authentic memoirs, with an introduction and notes by Archibald Dalzel. — London, 1793
xxxi, xxvi, 230 p., [7] leaves of plates (1 folded) : ill., map ; 29cm
(ダホメ王国史) 1冊
- 申請第15号 A geographical historie of Africa, written in Arabicke and Italian / by Iohn Leo ; translated and collected by Iohn Pory. — London, 1600
60, 420 p., [1] folded leaf of plates : map ; 26cm
(アラビア語、イタリア語によるアフリカ地誌) 1冊
- 申請第16号 Travels into the inland parts of Africa / by Francis Moore. — London, 1738
xiii, 305, 86, 23 p., [9] leaves of plates : map ; 21cm
背表紙標題 : Moore's travels in Africa
(アフリカ内陸部への旅行記) 1冊
- 申請第17号 Travels in the interior districts of Africa / by Mungo Park ; with an appendix, containing geographical illustrations of Africa by Major Rennell. — 2nd ed. London, 1799
xxviii, 372, xcii p., [8] leaves of plates : ill., maps, music ; 27cm
背表紙標題 : Park's travels in Africa
(アフリカ内陸部の旅行記) 1冊
- 申請第18号 Description de la Nigritie / par M.P.D.P. — Amsterdam, 1789
viii, 284 p., [9] leaves of plates : ill., charts ; 22cm
(黒人に関する記述) 1冊

- 申請第19号 An account of the colony of Sierra Leone, from its first establishment in 1793 : being the substance of a report delivered to the proprietors. — London, 1795
242, 31 p. : 1 map ; 23cm
(シエラ、レオーネ植民地についての記述—1793年の建設時より)
- 申請第20号 A new account of Guinea and the Slave — trade / by William Snelgrave. — London, 1754
288 p., [1] folded leaf of plates : map ; 20cm
(ギニア及び奴隷貿易に関する新しい記述) 1冊
- 申請第21号 A Treatise upon the trade from Great — Britain to Africa / by an African merchant. — London, 1772
64, 124 p. ; 27cm
(英国からアフリカへの貿易に関する論文) 1冊
- 申請第22号 Nouvell description de la ville de Paris / par Germain Brice. — 8e éd. — Paris, 1725
4 v. in 2 : ill., 17cm
(パリ市新案内記) 2冊
- 申請第23号 Etrennes ecclésiastiques [i.e. ecclésiastiques] : historiques et topographiques de l'archevêché de Paris et des beautés que l'on y admire — Paris, [1764]
103 p. : 15 maps (some col.) ;
- 18×11cm
標題部分 : Archeveché de Paris (パリ大司教区記録) 1冊
- 申請第24号 Description des curiosités des églises de Pris, et des environs / par Antoine — Martial Le Fèvre. — Paris, 1759
365 p. ; 17cm
(パリと郊外の教会案内) 1冊
- 申請第25号 Essais historiques sur Paris / par M. de Saint — Foix. Nouv. éd., 1777
4 v. ; 18cm
(パリ市史試論) 4冊
- 申請第26号 Histoire et recherches des antiquités de la ville de Paris / par Henri Sauval. — Paris, 1724
3 v. in 4 ; 39cm
(パリ市の起源と歴史の研究) 4冊
- 申請第27号 Plan de Paris, commencé l'année 1743 : dessiné et gravé sous les ordres de Michel — Étienne Turgot ..., achevé de graver en 1739
[Paris : s.n., 17—]
1 atlas ([42] leaves of plates) : 21 plans (copperplate —) ; 65×49cm
背表紙標題 : plan de Turgot : Paris 1734
(テュルゴアのパリ地図—1734年のパリ) 1冊

平成3年 秋期展示会の報告

『東アジアの文字と文献』 併設展：最近の貴重書

1) はじめに

1991年秋、『東アジアの文字と文献』というテーマのもとに京都大学附属図書館は恒例の展示会を設けた。内容は、東アジアの象形文字の流れを中心にそえて、それに対する表音文字の影響や疑似漢字の出現などを地域と時間の流れにそって、捉えるものであった。またそれぞれの文字が現代にどのような形で生きているかも、あわせて考慮した。会期は、平成3年11月14日（木）～22日（金）の8日間であり、日曜は閉館した。時間は9：30～4：30、場所は附属図書館3階の展示室であった。なお、併設展として、最近の貴重書も展示し、出品総数は100点を越えた。参加者にはアンケートをお願いしたが、最初にその簡単な結果を報告しておく。

(表1) 参観者状況

日付	曜日	9：30-12	12-13	13-16：30	人数
911114	木	30	16	48	94
15	金	30	41	112	183
16	土	64	15	70	149
18	月	31	29	75	135
19	火	43	35	65	143
20	水	43	28	89	160
21	木	29	25	84	138
22	金	43	37	151	231
合計		313	226	694	1233人
平均		39	28	87	154人

参観者の状況は(表1)を参照されたい。1233人の来館があった。内容が純粋に学術的であったにもかかわらず、総数が千人を越えたことについては、学内や一般市民のこの分野に対する並々ならぬ関心がかえるところである。言葉の通りに、会場が熱気に満ちていたのは事実であった。アンケートを見てみると、いくつかのお叱りもあったが、テーマ、目録、会場全般にわたって概ね好評であった。参加者が興味を惹かれた展示品としては、偽作といわれるほどに形態のととのったタイの「ラムカムヘング王碑文(レプリカ)」、歴史の教科書でよく見た「甲骨文字」の実物、五色の布地に書かれた満州の誥命(こうめい)、ポスター図案にもなった殿様蛙、いわゆる「納西(ナシ)象形文字」、井上靖の『敦煌』で著名な西夏、その華嚴経やコンピュータ出力の西夏文字、併設展の鈴鹿本「今昔物語集」(今昔物語集の祖本と考えられている)などがあげられる。

2) 趣旨

『今回の展示会は、附属図書館だけではなく文学部、人文科学研究所、東南アジア研究センターなどの、いわゆる国内でも有数の人文科学系諸機関に所蔵されている、由緒あり、また希な資料を一同に展示するものである。テーマ的にも、東アジア全域にわたる三千年の文字の歴史を一目で見渡せるような、気宇壮大なものである。このような事業が、附属図書館で容易にとりおこなえるのも、ひとえに京都大学の当該分野における研究実績が世界的なレベルにあることの証左でもある……』

というような趣旨メモが企画書の中には残っている。実際に企画運営に携わった館員の気持ちの表れであろう。

一般的に我々は西欧の歴史事績にはなじみがあるが、アジアについては知っているようで、意外に疎いところがある。ノルマンディー公ウィリアムの名は覚えていても、後期突厥（とっけつ）帝国のビルゲ可汗（かがん：首長）やその弟キョルテギンの名は殆ど忘れてしまっている。しかし、東アジアの征服王朝の数々が、アレキサンダー大王の版図も及ばない勢力と、別の文化を持っていた事実は、史をひもとけば直ちに了解される。モンゴル帝国なども、その文化意思や国家体系（システム）の緻密さは、知るものが皆圧倒される。

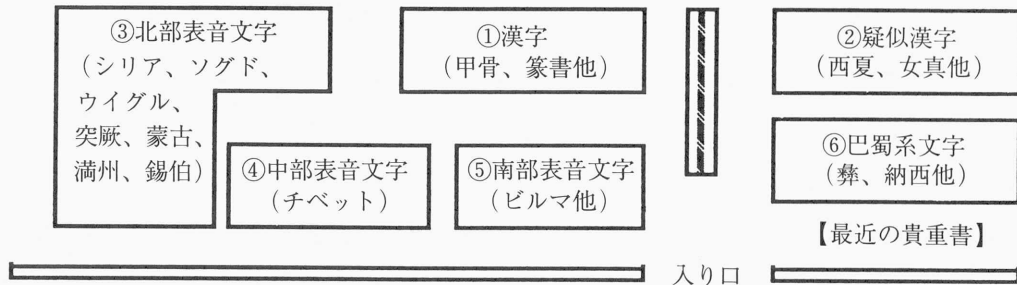
「うららかな唐の都長安の片隅で名を変えて鬱屈した人生を送っていた突厥の名門氏族が、後に名宰相として可汗を助け、その王子2人（弟は名に、湖のように聡明な、という由来のあるキョルテギン）を育て、突厥帝国を復興した」、というような史実は、歴史の厚みと文化交流の多様さや、その感性の同質性と異質性に感興を覚えるものがある。彼ら自身が文章を残したなら、どんな文字でどんな風にしたのだろうか、という後先した疑問は、オルホン河畔の「闕特勤（キョルテギン）碑」やその他突厥碑文によって氷解する。

今回のテーマは、そのような歴史を知れば知るほど、目の眩むような想像世界に引き込む蠱惑を持っていた。

3) 会場レイアウト

展示会のレイアウトは（図1）を参照されたい。このレイアウトは文学部西田龍雄教授の「東アジアの文字系統のあらまし」がもとになっている。無料配布された目録の巻頭の解説には、東アジアの文字系統を6つのブロックに分け、その地域分布と時代変遷が書かれている。ただし今回は、朝鮮と日本とは、分量の関係から省略された。

（図1）会場レイアウト



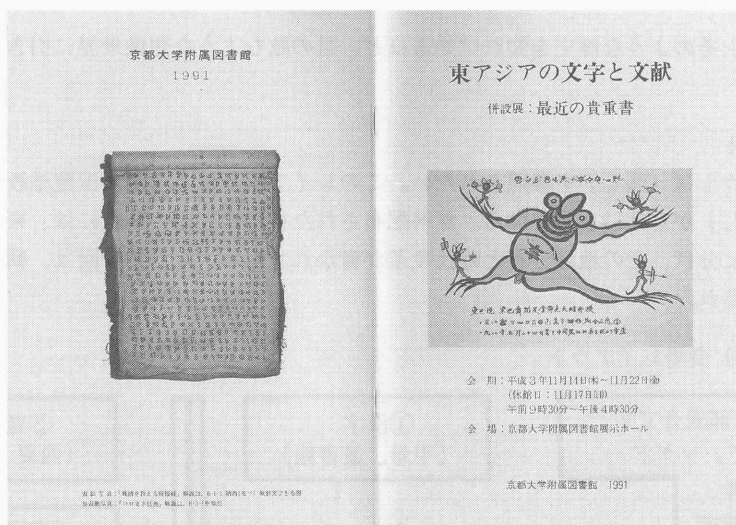
4) 展示目録

期間中配布された展示目録は、西田龍雄他編、B5版21頁、表紙裏表紙カラー、白黒写真6葉、図版1の小冊子である。ここではその構成を簡単に記しておく。括弧内の数字は出展品目数を意味する。（写真1）を参照されたい。

- *表紙 : 「舞踏を教える殿様蛙」納西（なし）象形文字、中国雲南省納西族の現代の東巴（とんぱ：巫師）が書いたもの。
- *裏表紙 : 「ロロ文字経典」明代の、中国西南地域（巴蜀の地）で書かれた、ロロ表意文字の経典。ロロ文字は彝（イ）文字ともいう。
- *図版 : 「東アジア主要文字の分布と系統」
- ①漢字 : 甲骨文（6）、金文（7）、篆書（3）、隸書（6）
写真・『唐写本説文解字残巻』、文学部蔵

- ②疑似漢字：契丹（5）、西夏（7）、女真（6）、字喃（2）、壮（1）文字
写真・西夏印章‘首領’、文学部蔵
- ③北部表音：シリア（4）、突厥（4）、ソグド（2）、ウイグル（3）、モンゴル；パスパ（10）、満州（4）、錫伯（2）文字
写真・『モンゴル大蔵経』、附属図書館蔵
- ④中部表音：チベット文字（6）
写真・『四部医典タンカ全集』
- ⑤南部表音：モン；ビルマ（3）、クメール；タイ；ラオス（5）文字
写真・「ラムカムヘング王碑文」、東南アジア研究センター蔵
- ⑥巴蜀文字：納西（4）、シャパ（1）、彝（6）文字
写真・『シャパ文暦書』

(写真1)
展示目録



5) おわりに

今回の展示会は附属図書館の所蔵物だけでは到底まかなえず、文学部、人文科学研究所、東南アジア研究センターから多大の御協力を得た。中でも、展示目録作成に関して、文学部の永田英正教授には「漢字」について相当なご負担をかけた。御牧克己教授にはチベット文字、西南アジア史学の大江節子氏にはシリア文字に関してご援助をいただいた。東洋史学の吉本道雅氏には貴重な拓本や印章、巻物の所在だけではなく、拓本展示のための特殊器具の詳細まで教えていただいた。あわせて文学部博物館からは相当数の展示器具を借用させていただいた。また、人文科学研究所の富谷至助教授からは館員が懇切丁寧なご指導を受けている。最後になるが、短期間で緻密な目録編集作業やそのほか全般にわたって、文学部言語学研究室の家本太郎氏のご協力ご援助は筆舌につくしがたいものがあった。

大学図書館が展示会を開催することの意義や効果は、附属図書館および館員としても充分理解できるものであるが、所蔵物の確認（京都大学のような古い大学では、一体何が存在しているのかが、館員にはまず分からない）から借用、展示器具にいたるまで、殆ど大学全域にわたる援助を必要とすることがあらためて痛感された。記して感謝する。

平成4年1月 図書館専門員
谷口敏夫

平成3年度 学術情報センター・総合目録

データベース実務研修 参加報告

附属図書館洋書目録情報掛

小 川 恭 弘

この長い名前の研修は、毎秋東京で4週間にわたって行われているものです。すでにご承知のとおり、全国の大学図書館等は共同で総合目録データベースの構築を進めています。その総元締めとなる学術情報センター（学情）に各大学から図書館職員が集まり研修を受けています。私は今年度の第2回の研修（91年11月11日から12月6日）に参加する機会を得ましたのでここに報告します。

誰しも研修の前には緊張や不安を覚えるのではないのでしょうか。私は長期の研修は初めてで、しかも「かなりきつい」との前評判でした。一か月も耐えられるかと不安に思っていたところ、初日のオリエンテーションで、「第1回では研修員の皆さんから課題が大変きついと文句を言われたので、今回は甘くしました」と聞いて、ラッキー!!と安堵し、懇親会では「実際に業務を担当している人間の顔を知ってもらいたい」というお話に、そうかこの方針で行こうと急に気が楽になりました。実際、画面や活字などを通じてしか知らなかった人に会い、物に触れるのはとても大切だと実感しました。学情の係員の皆さんも私と同世代で、酒を飲めば盛り上がるし、「ガクジョウ」に対するイメージはずいぶん変わりました。

研修の日程はつつがなく進みます。いくつか印象に残ったことを書きます。内藤衛亮先生の講義では、図書館の電子化が進行するなかで、旧式になった道具や機械が全くかえりみられず処分されるが、歴史を語る文化財として保存すべきではないか、というお話に、今の大学図書館にはそんな精神的ゆとりはないようだと思います。

情報検索の講義では、既にアメリカを中心に多くの商用データベースが普及し、それぞれが膨大なレコード件数を誇っているのを見ると、私たちが毎日行っている目録入力業務のなんとちっぽけ

なことと寂しくなります。しかし、小さいことを積み重ねないと大きなものはつくりられないのだと思います。

他大学の方々と目録の話が直接できたのも収穫でした。図書館職員ってまじめだなとつくづく感じました。16人が4班にわかれ、目録業務について出された課題を討議して提出するわけですが、皆さん実に入念に検討を加えていきます。我がA班は、どんぶり勘定の私が強引に「こんなもんでいいんじゃないですか」を連発したため、まことに迅速にレポートが完成し、他班の作業を尻目に打ち上げと称して飲みに出かけることができました。聞けば、第1回の方々は作業が深夜(?)に及んだそうです。早く帰れてよかったのですが、レビューの時間に他班のレポートに比べてA班のものがやけに薄いのが少々気になりました。

ところで、この学情の目録システムには、入門者向けの講習会があり、学情と各地方の大学図書館（例えば京大）で適時開催されています。昨年度から、この研修の第4週目に講習会が組み入れられ、私たち研修員がその講師役を勤めます。いわば教育実習です。これがドキドキもので、その予行演習ですらアガってしまいました。もっともそのおかげか、どんぶり勘定が効を奏したのか、本番は順調に進み、大勢の前で話すのは目立てて気分がいいものなどと一人悦に入ったりしました。受講者のアンケートのなかでもお褒めをいただき（ほとんど手前味噌）、職場に戻ってから掛で自慢している次第です。

生活面についても少しつけ加えます。ひと月も東京で暮らせてうらやましいとお思いかもかもしれませんが、楽なものではありません。初日の朝地下鉄丸の内線に乗ったらあまりのぎゅうぎゅう詰め

歩いて通いました。駅の改札口まで1分の宿にした意味が半減です。立ち食いそばのつゆはからくてまずいし。電話ボックスに12の言語で「電話機

を壊すと逮捕される」旨の警告がかかげられ、飲食店の従業員に外国人労働者が目だつのはいかにも東京だと思いました。



主題別研究集会の開催

平成3年度 近畿地区国公立大学図書館競技会の標記研修会が1月31日（金）の午後、本学附属図書館のAVホールで開催されました。

今回のテーマは「ILLシステム運用上の諸問題について」で、4月のILLシステム運用開始を前に、開発システムの概要及び構築されたシステムについて、更に理解を深めるとともに、実例を検証して、運用開始までに解決すべき問題点を明らかにすることでありました。

プログラムは、京都大学西田館長の開会の挨拶

に続いて、学術情報センター宮澤彰教授により「NACISIS-ILLシステムについて」と題して開発の考え方とシステムの概要についての講演があり、休憩を挟んで、「ILLローカルシステムの開発」について2つの報告、「ILLシステムオペレーション」、質疑応答ののち、京都大学吉岡事務部長の閉会の挨拶があり終了しました。

なお、本研究集会は、近畿北部地区国立大学図書館機械化連絡委員会の共催で行われ、26大学、101名の参加がありました。

以上



附属図書館長の交代

西田龍雄館長は、平成4年3月末をもって定年退官となり、後任館長人選について、総長から商議会諮問が行われた。

「京都大学附属図書館長候補者選考規程」に基づき、2月28日開催の商議会で候補者の選考が行われ、総長に答申される予定である。

後任者の任期は、平成4年4月から3ヵ年となっている。

「京都大学附属図書館における電子ファイリングシステム」報告書作成

平成3年度 学内特別研究経費で附属図書館が実施した研究結果の報告書を作成、年度内に内外の関係者に配布の予定である。

附属図書館事務部情報サービス課が配布の窓口となり、希望者の受付を行う予定。